

---

## 災害時の医療統括の重要性を痛感しました

(川越一男、海堂尊・監修：救命 東日本大震災、医師たちの奮闘、東京、2011、157-179)

2018年3月9日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

### 1. 予想していた状況とは全く違っていました

筆者は震災当日、千葉県船橋市医師会の1室で仕事をしていたところ、物凄い揺れが来た。千葉県でも様々な被害があったが、筆者の勤める五井病院では災害時に関するマニュアルを作っていたこともあり、病院の機能は平常に保たれていた。そんな中、テレビで被災地の惨状を見るほどに”これはなんとか助けなければいけない”と思い、岩手に向かうことにした。すぐにでも向かいたかったが、薬剤や救援物資を揃えるのに時間がかかり、ようやく岩手に向かって出発出来たのは、震災から5日後のことだった。筆者は避難所回りをすることになった。津波に襲われたところと、波が来ていないところとでは、まるで景色が違っていった。同じ集落でも津波にさらされた跡は流された家屋の瓦礫が山積みになっており、波が来ていないところは何事もなかった。さらに海沿いに行くと凄惨な光景だった。もともとは集落があった場所に残っていたのは小学校の建物のみで、あとはすっかり消えて瓦礫すらない。悲惨すぎて、「頑張ろう」なんてとても言えなかった。実際に医療の救援活動をするにしても、あらかじめ予測していた状況とは全然違っていった。まず、避難所へ行っても、外傷などの怪我人がいなかった。津波に飲まれた人は亡くなっているし、逃げて助かった人はほとんど怪我をしていない。阪神大震災ではクラッシュシンδροームなどの外傷が多く、救命医が必要とされたのに対し、今回の震災は内科的疾患がほとんどだった。筆者が驚いたのは、「何か必要な物はありますか？」と聞くと、避難している方たちは一様に、「自分より困っている人はたくさんいる。だから、私は大丈夫」と言ったことだった。また、家族を亡くされた方もたくさんいたが、弱音をもらす方はほとんどいなかった。筆者は出来る限り避難されている方たちに寄り添うようにしていたら、「前を向いて頑張るよ」という方が多く、あれほどの壮絶な体験をしたのに、この人たちはなんてすごいんだろう、と心打たれるばかりだった。

### 2. 僕らが励まされることもありました

二日目は大槌地区の避難所に向かった。津波で甚大な被害を受けた町中心部では、大槌病院が全滅し、ほとんどの医療機関が機能なくなっていた。寺に避難し皆で協力してい

て明るくふるまう人々、在宅で避難生活をし皆で助け合う人々などがいた。避難している人の数だけ不幸があるように思っていたが、多くの人は懸命に生きようとしていた。東北の人の強さを垣間見る思いで、こちらも頑張ろうと強く思った。避難所で一所懸命、生活している人たちを見ていると、筆者たちは逆に励まされることもあった。なかでも感銘を覚えたのは、診察した方の中で最高齢の百三歳のおばあちゃんで、とてもお元気そうで周りの人と楽しげに笑いながら会話していた。在宅訪問では帰り際にお土産をくれる方もおり、昔ながらの日本人の良心を持って生活している人なのだと思った。活動を終えたときは、本当に助けになったのかなというのが筆者の正直な気持ちだった。筆者が2回目に現地入りでは、大槌の山深い集落での在宅の巡回診療を行なった。避難所で医療が足りていても、医療が行き届いていない集落もあるのだ。2回目に行って気付いたことは、避難所には薬が行き届いているにも関わらず、血圧が高い人や不眠の人が増えていたことで、それほどストレスが増しているのだと感じた。時間とともに被災地の状況は変化していくのだろう。支援活動を通して最も気にかかったのは、医療をいかに統括するかということだった。災害時には被災地における医療を統制することが大事なのだ。そこで問題なのは、医者自身が医療に統制されるのを嫌うこと。医者は自分の意思で動きたがりそれぞれの組織にも独自のマニュアルがあり、これをまとめる機能が医療の世界にはない。

### 3. 医者になってよかった、と思った瞬間

もとより筆者は、「医者は絶対に現場を投げ出してはならない」と考えている。救命救急とは、本質的にチーム医療である。外科的疾患でも内科的疾患でもチームを組んで治療にあたる。だから、救命医はいろんな病気を診られるようになる。また、災害や事故の現場で大量に患者が出ると、この人は助かるか、助からないかという判断を委ねられる。その上で、助けられる命のために全力を尽くす。今回の震災でも、初期の命を助ける医療行為に関して自信を持っているので救命医はどこへでも行くし、どんな怪我や病気でも対処できる。災害はそれぞれに被害の形態が異なり、まったく同じ状況などありえないので、すべて1つの「災害マニュアル」という形で対応できるのかを再考する必要があるのではないか。人の生死は神しか決められないが、医療者も時に神にならなければならないときがあるが、人の生死に関わる仕事だから、何より目の前で苦しんでいる人を死なせてはならない。実は筆者はこれまでに医者になって良かったなんてあまり感じたことはなかったが、今回、岩手に行つて、「本当に遠いところから来てくれてありがとう」と言われたときには、「ああ、良かったなあ」と思った。